Japanese Red Cross Society NEWS

赤十字 NEWS

http://www.jrc.or.jp

September 2017
NO.928
9

平成29年9月1日（毎月1日発行）
赤十字新聞　第928号
昭和24年9月30日 第三種郵便物認可

見えないところに大きな力。

日本全国、
いつ何時発生するか分からない災害。
発災時にいち早く駆け付け、
救護活動を行えるよう、
日赤は日々、
救護班の体制を整えています。
そんな救護班要員の中に、
その存在なしには「班が成り立たない」
と医師や看護師に言わしめる、
“名裏方”が存在することを、
ご存じでしょうか――。

CONTENTS

FEATURE__2
医師、看護師が頼りにする
「主事(管理要員)」って？
救護班には……
知られざる“縁の下の力持ち”がいた！

TOPICS__4
第46回
フローレンス・ナイチンゲール記章授与式
紛争で苦しむ人々に寄り添う現役看護師が世界最高栄誉の記章を受章

TOPICS__5
一刻も早く、少しでも力に。
平成29年7月九州北部豪雨 支援活動

Column
［とっさのとき、どうする？］
食中毒

AREA NEWS__6
北海道／千葉／神奈川／東京／岐阜／大阪／広島／愛媛

Column
［健康豆知識］
顎(がく)関節症

WORLD NEWS__8
東アジア青少年赤十字サマーキャンプ
気候変動による自然災害に立ち向かうため中・高生が国境を越えて、熱く議論

赤十字新聞　編集・発行／日本赤十字社 広報室
〒105-8521 東京都港区芝大門 1-1-3
TEL：03-3438-1311
一部 20 円
赤十字新聞の購読料は会費に含まれています。

人間を救うのは、人間だ。

日本赤十字社
Japanese Red Cross Society

平成29年9月1日（毎月1日発行） 第928号（昭和24年9月30日 第三種郵便物認可）

FEATURE

日本赤十字社の災害救護業務には、次の５つがあります（日本赤十字社救護規則第２条）。①医療救護、②救援物資の備蓄と配分、③災害時の血液製剤の供給、④義援金の受付と配分、⑤その他災害救護に必要な業務（防災ボランティアによる活動や外国人の安否調査など）です。今回は、被災地での医療救護活動を行う救護班の中でも主事、または管理要員と呼ばれる陰の立役者を紹介します。

医師、看護師が頼りにする「主事（管理要員）」って？ 救護班には……

知られざる“縁の下の力持ち”がいた！

平時から研修を重ね、いざというときに備えています

被災者を支えるべく、救護班は全国各地へ駆け付けます

避難所でプライベート空間を確保するための簡易更衣室なども主事が設置

救護班要員のすること

日赤は災害時に備え、「救護班」を全国に約500班（約7000人）常備。救護班の基本編成は、医師１人、看護師長１人、看護師２人、主事（管理要員）２人の計６人（状況に応じ、上記人員の増減や、薬剤師、助産師などを加えることが可能）です。通常は各都道府県支部や赤十字病院などで働き、研修や訓練を通じて、災害救護に必要な知識や技術を身に付けています。

災害が起きると基本的には、被災都道府県→被災地支部→救護班といった形で派遣要請・指示が出ます。被災地に出動すると、被災都道府県の災害救護実施対策本部などと連携・調整し、避難所などに救護所を設置。けがをした方や体調を崩した方の診療を行うほか、避難所で過ごす被災者の健康管理や生活環境を確認する巡回診療、被災地の病院業務の支援などに力を尽くします。

救護班の大きな特徴は「自己完結型」であること。災害発生直後、被災地の多くは、電気や水道が止まり、道路が寸断されて物流がストップすることも。被災地に負担を掛けないよう、医療用の資機材はもちろん、通信や活動に必要な資機材、救護要員が現地で過ごすための食料や燃料、テントなどを備えて、現地に向かいます。

環境を整える主事（管理要員）

主事は、班のスタッフの中で唯一、医療職ではない事務職員が任命されるポジションです。その役割は、病院とは全く異なる状況下で、医師や看護師が医療活動に集中できるよう「環境を整えること」。医療スタッフが現地に行くだけで診療ができるわけではありません。班員全員の衣食住や事務作業など、医療以外の役割を一手に引き受けます。

救護所の受付やカルテの管理、関係機関などとの調整、会計、通信機器の操作、被災地までの車の運転、ビデオや写真での記録、後続の班への引き継ぎなど、出動から被災地を引き揚げるまで、医療行為以外のあらゆることが主事の仕事です。

被災地で多くの方を診療し励ます医療救護活動。その陰には必ず、医師や看護師を支えている主事の姿があります。“主事”“管理要員”と書かれた救護服を着用した救護班要員を見掛けた際には、知られざる陰の立役者を温かく見守ってください！

看護師長

荒木冨久美◎熊本赤十字病院看護師長。第１班に所属。中越沖地震、熊本地震で救護班活動の経験を持つベテラン

主事（管理要員）

荘田卓哉◎熊本県支部事業推進課主事。平成27年度まで特殊救護員。東日本大震災、九州北部豪雨の被災地に出動

主事（管理要員）

伊藤龍馬◎熊本赤十字病院救急業務課主事。特殊救護員として登録。熊本地震では巡回診療などの活動に従事

医師

奥本克己◎熊本赤十字病院第一救急科部長。平成18年度から救護班要員として活動。熊本地震では、県の災害医療コーディネーターとして活躍

看護師

平木上子◎熊本赤十字病院看護師。平成29年度より第６班に所属。「熊本地震で受けた救援の恩返しがしたい」

看護師

枝川雄樹◎熊本赤十字病院看護師。平成28年度より第６班に所属。「被災者が安心できるケアを届けたい」

FEATURE

［ドクター・ナースが語る"主事"という存在］

救護班に欠かせない主事の存在は、共に活動する医療スタッフの目に、どのように映っているのでしょうか。経験豊富な奥本医師と荒木看護師長に聞きました。

奥本医師

医師と看護師が役に立てるかは、主事次第

救護班のリーダーは医師ですが、本音を言うと、私たちは医療以外のことは素人も同然。主事さんなしではスムーズに仕事ができません。現場で特にすごいと感じるのは、自治体や現地の医療機関など、他の組織とすぐに関係を築く力ですね。避難所での医療ニーズを把握したり、赤十字としての活動をアピールしたり。周りの組織と情報をやり取りして調整してくれるからこそ、その場に適した活動ができます。我々が現場で役に立てるかどうかは、主事さん次第なんです。

チームで頑張ろうという空気をつくってくれます

医療に集中して視野が狭くなりがちな私たちに代わって、全体を俯瞰（ふかん）してくれているのが主事さん。救護所を設置するときに、スタッフや患者さんの動線を考えた配置をアドバイスしてくれたり、医療者とは違う視点を持って助けてくれているのを感じます。熊本地震の現場では、救護班要員として初めて活動するスタッフも多く、緊張をほぐすために声を掛けている姿も印象的でした。チームで一緒に頑張ろう、という空気をつくってくれる主事さんは、救護班のムードメーカーですね。

荒木看護師長

救護班要員として……業務に懸ける思い

荘田主事

全ては、医療救護に専念してもらうために

初めて救護班要員として出動したのは、東日本大震災で被災した宮城県内です。３月でしたが現地はまだ寒く、寝泊まりしていたテントでは、暖房が切れるとテント内につららができるほど。医療スタッフが寒さや睡眠不足で体調を崩さないよう、夜中に起きて暖房器具に給油する、というのも私の役目でしたね。他にも、休憩スペースのポットの湯は足りているか、ごみ袋はいっぱいになっていないか、といった生活に関する細かなことにも気を配っていました。医師と看護師に、万全の状態で医療救護に専念してもらうため、医療以外の全てが私たちの仕事だと考えています。主事としてのスキルをもっと高め、スタッフに「荘田と一緒だと助かる」と思ってもらえるようになりたいです。

［主事（管理要員）の任務を支える 災害現場の相棒たち］

～彼らの仕事を支える必須道具をご紹介～

■救護班としての携行品

❶❷150・400MHz帯用無線機：日本赤十字社全国共通の周波数。通信網の確保。
❸衛星電話：携帯電話が使えない場合の通信確保
❹ビデオカメラ：現地の様子や救護活動を記録
❺タブレット端末：移動中や現地での情報収集および情報発信に活用
❻Wi-Fiルーター：インターネット通信の確保
❼PC：メールの送受信、情報収集、診療記録の管理などに使用
❽事務用品セット：トリアージタグ、救護班名簿、救護カルテ、救護日誌やハサミ、ガムテープ、電卓、スケールなど

■個人携行品

❶❷150・400MHz帯用無線機：日本赤十字社全国共通の周波数。通信網の確保
❾ペンライト：作業時の手元や足元を照らす
❿グローブ：救護資機材や車両操作時の安全確保
⓫ヘルメット・ゴーグル・ヘッドライト：救護班要員の安全確保
⓬救護班要員用個人バッグ：救護用の小さな道具や身の回りの物を入れて持ち歩く（五徳ナイフ、キューマスク）

主事さんのお仕事紹介

出動から現地を引き揚げるまで、さまざまな場面で求められる主事の力。その幅広い仕事の一部を紹介します。

熊本地震の際には、避難所で被災者の方に体調などお話を伺いました。余震が続く中でしたが、年配の方に「救護服姿の人がいてくれるだけで安心できる」と言ってもらえたことが、特に心に残っています。今後も研修や訓練を重ねて知識を蓄え、救護活動に貢献したいです。

伊藤主事

お仕事 1 現場までのルートを調査

情報を集めて安全なルートを探します。地元の道を熟知している防災ボランティア（バイク隊ほか）の方に誘導いただくことも

お仕事 2 テントの組み立て

救護所となるテントを設営します。「私たちも頑張って手伝いますが、やっぱり主事さんは上手です」と奥本医師

お仕事 3 救護所の受付

診療に訪れた方から状況を伺い、傷病者受付用紙を作成。救護所内では、傷病者の記録や資機材の管理、通信連絡も主事の仕事です

お仕事 4 関係機関との調整

被災地の自治体、警察、消防、医師会など、関係機関と緊密に連絡調整を行います。「避難所では保健師さんからの情報も大事」と伊藤さん

お仕事 5 メディア対応

救護活動が報道されることは、被災者への情報提供にもつながります。取材の際には、被災者や患者さんへの十分な配慮が欠かせません

平成29年9月1日（毎月1日発行） 第928号（昭和24年9月30日 第三種郵便物認可）

TOPICS

第46回フローレンス・ナイチンゲール記章授与式

2017年8月2日 於:東京プリンスホテル

紛争で苦しむ人々に寄り添う現役看護師が世界最高栄誉の記章を受章

８月２日、東京・港区の東京プリンスホテルにて、日本赤十字社名誉総裁の皇后陛下、名誉副総裁の皇太子妃殿下、秋篠宮妃殿下、寛仁親王妃殿下のご臨席の下、世界の看護師にとって最高の栄誉である「フローレンス・ナイチンゲール記章授与式」が行われました。受章者の名古屋第二赤十字病院の伊藤明子副院長兼看護部長には、日本赤十字社名誉総裁皇后陛下より記章が授与されました。

「フローレンス・ナイチンゲール記章」は、近代看護を確立したナイチンゲール女史の功績を記念し、紛争や災害時の看護活動、公衆衛生や看護教育の分野で多大な貢献をした看護師などに、赤十字国際委員会から２年に１度贈られるもの。今回受章した伊藤副院長は、これまでにケニアやアフガニスタンなど多くの紛争地域で、多国籍の医師、看護師らで構成される国際赤十字の医療チームを束ねる、日本人の事業責任者として手腕を発揮してきました。

近衛忠煇日本赤十字社社長はあいさつで、アフガニスタンで捕虜の解放を目的に武装集団が刑務所を襲撃し、病院に多くの負傷者が搬送された時に、伊藤副院長が紛争地域で赤十字の使命を全うしたエピソードを披露。脱走の危険性を理由に、両手足に錠をかけられていた負傷者を目の当たりにし、「国際人道法では、生命と尊厳は、捕虜の身分とは無関係に一人の人間として守られなければならない」ことを治安当局と粘り強く交渉。結果として、状態が安定するまで負傷者の手足の錠が外されたことは、赤十字が掲げる人道の精神が発揮された証と同副院長を称えました。

赤十字の看護師として人道の理念と、事業責任者として勇気と強いリーダーシップを持って、苦しむ人々を救った伊藤副院長。このような紛争地域での救援や国内の大規模災害での救護の功績が評価され、今回の受章となりました。

この度授与されたフローレンス・ナイチンゲール記章

さいたま・長岡赤十字看護専門学校の学生によりキャンドルサービスが行われました

ナイチンゲール記章受章者　伊藤明子副院長に聞く「これまでの活動と思い」

「紛争下で傷ついた人々の救援活動や、被災地での支援活動を通して、苦しんでいる多くの方に寄り添い、看護師としての責務を果たすと共に、赤十字の基本理念である『人道』を実践することを第一としてまいりました」。伊藤明子副院長はこれまでの活動と思いを、そのように述べました。

初めての海外派遣で、想像を超える状況を目の当たりにし、その後の国際活動への思いと継続につながったと言います。

また、紛争地域での活動の労をねぎらって周囲から「いい経験をされましたね」という言葉を掛けられると違和感を覚え、“いい経験をした”だけで終わらせてはならない、と自らの責任を認識。自分のやってきたことを人々に伝え、何らかの結果を出すことを実践し続けた30年間だったと振り返りました。

小児病棟でドイツの男性看護師とアフガニスタンの看護師長と薬の管理について相談中（©ICRC）

紛争下において病院が病院として機能するためには、建築の改修工事計画や医療機器の整備、医薬品の供給などの物的な支援と、現地の医療従事者の教育などの人的な支援が必要です。病院事業責任者である伊藤副院長の役割は、赤十字国際委員会の医療スタッフの責任者として、現地の病院関係者と共により良い医療体制を作り上げることでした。そして、外国人チームが去った後も、医療機関がうまく持続できるように体制を整えることが重要な使命だったと語ります。

伊藤副院長は、赤十字の原則である『中立』の重要性も訴えます。「紛争地域では、現地の医療従事者が中立であろうとすると、対立する側から敵と見なされて危険にさらされることも。敵味方の区別なく医療を行う、その『中立』を実践するのに、私たちのような外国人が重要な役割を担うのです」

豊富な国際活動の経験を生かし、東日本大震災や熊本地震などの国内災害の際も、昼夜問わず負傷者を受け入れた被災医療施設を病院支援コーディネーターとして支えた伊藤副院長。今後は、赤十字の看護師や医師たちの活躍を応援するために、全力で後進の指導にあたっていきたいと語りました。

病院の患者・職員の食事を作るスタッフと共に（©ICRC）

PROFILE
伊藤明子（いとう　あきこ）
名古屋第二赤十字病院副院長兼看護部長。紛争地域や被災地において、国際赤十字の医療チームを束ねる事業責任者として、数々の現場で指揮を執った経験を有する。1988（昭和63）年に国際赤十字・赤新月社連盟（IFRC）の要請を受け、ベトナム難民を収容したマレーシア国ビドン島に派遣されたのを皮切りに、ケニア、東ティモール、アフガニスタン、インドネシア、パキスタンなど各国で医療救援活動に従事した。

平成29年７月九州北部豪雨 支援活動 一刻も早く、少しでも力に。

九州北部を襲った豪雨災害から約２カ月。日本赤十字社は発災直後から被災地に医療救護班を派遣し、救援物資をお届けしました。その後は近隣の奉仕団も活動し、避難を余儀なくされた方たちをさまざまな角度から支援しています。

避難所では、布団が届くまでの間、いち早く届いた救援物資の毛布をマット代わりに床に敷いて役立てたという声も

夜を徹して被災者の言葉に耳を傾け、健康相談に応じる看護師

大分県日田市小野地区で土砂に半分埋まってしまった被災家屋

７月５日からの大雨による災害は、福岡県を中心とする８県で死者38人、行方不明者５人、負傷者28人、被害を受けた住宅が全壊276棟を含む3281棟にのぼるなど、深刻な被害をもたらしました(8月 21日現在 消防庁発表)。

日本赤十字社では、ただちに福岡、嘉麻、今津、大分の各赤十字病院が現地医療ニーズの調査班を派遣。また、毛布や緊急セット、安眠セットなどの救援物資を被災者にお届けしました。

さらに、７月12日から８月17日まで、福岡県の避難所では、夜間の健康支援やこころのケアを実施。不自由な避難所生活で身体的・精神的な体調の不安を抱える方たちの健康を守るため、看護師ら125人（延べ人員）を派遣し、1152人の被災者の対応にあたっています（８月17日現在）。

奉仕団も食と癒やしでサポート

食べる段階になって、ちょうど良い味になることを想定して調味する配慮も

朝倉市杷木地区の伊藤邦敏さん。待ち望んだ温かい食事を完食

藤本義広さん（写真左）と小川信博さん（写真右）は、生まれも育ちも朝倉市杷木の幼なじみ。杷木地区に住み続けられるのかを心配する藤本さんも、豚汁に笑顔

７月21日、福岡県支部防災ボランティア会と朝倉市赤十字奉仕団が、避難所となった福岡県朝倉市の杷木中学校を訪問。炊き出しを行いました。食材のほか、断水だったため水も運搬し、「地元のために」と思いを込めて調理。昼食に約150食の豚汁を振る舞いました。胃腸の調子を崩しがちな被災者も多い中、野菜たっぷりの温かい豚汁は大好評。「私たちのことを思ってくれている、その気持ちがうれしいです。支援してくださった皆さんに感謝しています」と涙ぐんで語る方もいました。

福岡県いやしのケア赤十字奉仕団「なごみ」も、同避難所で奉仕活動を実施。避難所で生活する方は、被災した自宅の片付けで疲れた体を硬い畳に横たえて休むため、疲労は蓄積する一方です。庄野まり子委員長は「周りの方への配慮の疲れもあるようだ」と話し、心身のストレス緩和のケアを行いました。

「避難所の床が硬くて背中が痛かった」と91歳の権藤吉満さん。奉仕団の宮崎悦子さんのケアにホッとした表情

※ 福岡県・大分県にて合計86人の赤十字奉仕団員が活動しました（８月18日時点）。

義援金受付の延長のお知らせ

義援金名称 平成29年7月5日からの大雨災害義援金

受付期間 平成29年12月28日（木）まで

郵便振替 （ゆうちょ銀行・郵便局）

口座記号番号 00190-2-696842
口座加入者名 日赤平成29年７月大雨災害義援金

※窓口でのお振込の場合は、振込手数料は免除されます
※窓口でお渡しする半券（受領証）は、所得税の寄付金控除申請の際に必要となります
※銀行振り込み、被災県の福岡県支部・大分県支部の口座でも受け付けております
※お寄せいただいた義援金は、手数料などをいただくことなく、全額を被災された方々へお届けします

詳しくは日本赤十字社のウェブサイト（http://www.jrc.or.jp）をご覧ください

「とっさのとき、どうする？」は切り取って保存していただけます

file.4
とっさのとき、どうする？

突然の下痢、嘔吐……意外と多い秋の食中毒に注意！

急病編② 食中毒

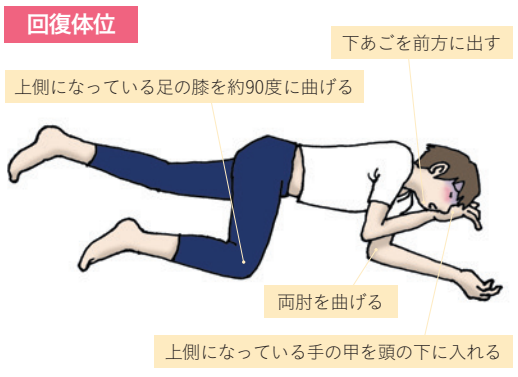
夏場に多い食中毒ですが、実は、暑さが続く秋にも気を付けたい病気の一つです。

細菌やウイルスが付着した食品を食べることで、腹痛や嘔吐（おうと）、下痢などの症状に見舞われ、重篤化すると死に至ることもあります。作り置きの食材や、常温で持ち運んだお弁当にも注意が必要です。

細菌感染は予防が可能です。こまめにせっけんで手を洗う、調理器具を適切に消毒する、調理済みの食品は必ず冷蔵庫に入れる、などを徹底しましょう。調理者の手指に傷がある場合は、ビニール手袋などを使います。傷口に潜むブドウ球菌が繁殖する危険があるからです。

下痢や嘔吐が続くと、それらを止める薬を飲んでしまいがちですが、原因がはっきりするまでは自己判断で薬を飲むのは控えましょう。吐いた後は水ですすぐなど、口の中をさっぱりさせます。すぐに水分をとると再び吐きやすいので、様子をみながら、脱水防止のために少量ずつ水分を取りましょう。また、吐いた物が気管に入らないように、気道を確保する体位（回復体位）を取り、楽な体勢で体を休めます。一晩たっても症状が治まらない場合や症状がひどくなる時には、すぐに病院へ行きましょう。

回復体位



回復体位を取ると、吐物が気管に入ることを防げます。また、吐物を医師に見せると、食中毒の原因が判明する可能性が高まります

※詳細は赤十字救急法講習を受講ください。 受講のお問い合わせは、日赤の各都道府県支部へ。

AREA NEWS

日々の生活や未来を支援するために。
全国各地、あなたの生活のすぐそばで、
日本赤十字社の活動は行われています。

北海道

日ハム選手が入院中の子どもたちを激励に

7月24日、釧路赤十字病院の小児科病棟を北海道日本ハムファイターズのレアード選手（中央）、マーティン選手（左）、ドレイク選手（右）が訪れました。この訪問は、以前よりレアード選手が子どもたちを元気づけたいと病院訪問を希望されていたことから実現。選手たちは入院中の子どもたち一人一人に「がんばって！」と激励の言葉を掛け、病棟が明るい笑顔に包まれました。

サインボールなどもプレゼント。感激のあまり泣き出してしまう子も

千葉県

千葉発、朝倉市に届け「元気」！ちびっこ救護員の「応援メッセージ」

千葉県支部は、7月30日にお仕事体験「赤十字KIDS CROSS」を開催しました。テーマは「自分たちにできること」。参加者は、記録的な豪雨で甚大な被害を受けた福岡県朝倉市の被災者へ向けて、応援メッセージフラッグを作成しました。８月３日、そのフラッグは福岡県支部を通じて避難所に送られ、子どもたちの明るい励ましが朝倉市の皆さんに届きました。

朝倉市立杷木中学校の避難所入り口に貼られたフラッグ

大阪府

政府主催の大規模医療活動訓練で日本最大規模の「仮設診療所」を設置

7月28日、29日、内閣府などが南海トラフ巨大地震を想定した大規模医療活動訓練を実施。

大阪赤十字病院は、テント46張りや医療車両などを80m四方に展開、集中治療室や手術室なども有する国内最大規模のdERU（仮設診療所）を設置しました。大阪府支部、高槻赤十字病院、他医療機関と協働し医師や看護師ら約250人が参加、災害時の連携を確認しました。

岸和田SCU（患者搬送拠点としての臨時医療施設）に展開されたdERU

岐阜県

研修医向けスピリチュアル研修 避けられない死を考える場

6月23日、24日、高山赤十字病院は1年目の研修医を対象に「スピリチュアル研修」を仏教寺院千光寺で行いました。本研修では、研修医が医師としてどう死に向き合い、患者さんやご家族に寄り添うのかを考えます。医療現場でのケアワーカーとして実績のある千光寺の住職と、死の疑似体験などを行った研修医は、新たな視点を得たと語りました。

座学と実技を組み合わせた１泊２日の研修

広島県

ダニ感染症「ＳＦＴＳ」を正しく知って予防

三原赤十字病院では、7月29日、地域公開講座『ダニによってかかる感染症「SFTS」～三原における現状とその対策～』を開催。ダニの標本や吸着部位の写真展示を行いました。

三原市内ではダニ感染症が確認され、死者も出ていることから地域住民の方の関心が高く、約100人が参加。ダニの生態や咬（か）まれた際の症状や対応について熱心に聴講しました。

大きくなるマダニのライフサイクルを学習

「知ってて良かった！健康豆知識」は切り取って保存していただけます

日赤のドクター＆ナースが教える
知ってて良かった！
健康豆知識

file. 38

口が開かない？ 顎関節症（がくかんせつしょう）とは

大阪赤十字病院　歯科口腔外科医師　渡辺昌広
大阪市天王寺区筆ヶ崎町5-30　TEL 06-6774-5111（代）

①顎（あご）の関節や筋肉が痛む②顎を動かすとカクッと音がする③口が開かない、または開きにくい、といった症状はありませんか。どれか一つでも該当する場合、顎（がく）関節症が疑われます。

以前は、かみ合わせや骨格が原因で発症すると考えられていましたが、現在は顎関節への負荷によるものだと判明しています。歯を食いしばる癖がある、ガムをずっとかんでいる、よく頬杖（ほおづえ）をつくなど、患者さんの多くが顎に負担がかかる癖や習慣を持っています。

「顎に音がする」状態は、顎関節のクッションである関節円板のズレや変形により起こります。実は、音がすることに対する効果的な治療法は存在しません。そのため、口が開かない、痛みが強いなどの自覚症状があって初めて治療対象となります。

自然治癒することもあり、重症化することはまれですが、放置していたために骨が癒着（ゆちゃく）し、外科手術が必要になるケースもあります。顎関節症と同じような症状の出る別の病気が隠れている可能性もありますので、口が開かない、痛みが強いなどの症状がある方は、早めに歯科医へご相談ください。

歯を食いしばる、ガムをずっとかんでいる、頬杖をつくなど、顎関節に負荷がかかる習慣を直すことで、症状の緩和や予防ができます

神奈川県

水辺の事故から自分を守る！横浜海上保安部とコラボ授業

神奈川県支部は、7月14日、横浜市立蒔田小学校で水上安全法の出張授業を行いました。海上保安庁横浜海上保安部はライフジャケットの着用方法を指導。日赤は着衣での指導を行い、自分の泳力を過信せず身近なものを浮き具として活用する知識や、万一の時には泳がずに浮いて待つ技術など、6年生の73人が水難事故からの命の守り方を学びました。

「ペットボトルでこんなに浮けるんだ」。補助具で浮く方法も体験

広島県

原爆投下から72年 慰霊式で「人道」の原点を再確認

広島赤十字・原爆病院は、8月6日、メモリアルパークにて原爆殉職職員ならびに戦没職員の慰霊式を執り行いました。被爆当時、病院の死者は51人、重軽傷者250人という甚大な被害を受けながら、生き残った職員たちは不眠不休で救護活動を実施。日赤関連施設の職員や関係者はこの「人道」の原点を引き継ぐ決意を胸に、一般の方と共に黙祷（もくとう）を捧げました。

平和を祈る慰霊式で黙祷する参列者

愛媛県

小学生「まち探検」で赤十字看護の理解を深める

6月8日、松山市立清水小の2年生12人が、松山赤十字看護専門学校を訪れました。同校が地域貢献活動として参加している「まち探検」という校外学習のためです。授業を見学したほか、聴診器の体験や人形を用いた赤ちゃんの世話などを実施。赤十字看護の一端を学んだ児童からは「看護の道に進むのはすごく大変だと思った」という声がありました。

聴診器で自分の心臓の音を聴き、生きていることを実感

東京都

未来は自分たちで創る！中・高生が考える復興支援

8月8日、東日本大震災の復興支援イベント「STAND UP SUMMIT 2017」が東京ビッグサイトで開催され、都内や東北、熊本、海外から集まった約300人の中・高生が復興について真剣に議論しました。

日本赤十字社は「国際協力」をテーマにブースを出展。参加した学生たちは、震災時に世界100カ国から約1002億円もの支援があったことに驚きの表情を見せました。さらに、海外で起きている紛争、難民や災害の状況について学び、「自分たちにできること」をディスカッション。成果をポスターにまとめ、参加者全員の前で発表しました。

岩手県の中学２年生、小笠原さんは「震災当時は自分のことで精いっぱいだったけれど、いろいろな国の人から支えられていたと知り感激した」。高校３年生の高泉さんは「世界の課題について、周りの人を巻き込んで問題意識を高めたい」と、国際協力について考えを深めていました。

スペシャルゲストの為末大さんを囲んで、参加者全員で集合写真

日赤ブースでは海外で苦しんでいる人たちに対してできることを一人一人が考えるグループワークを実施

あなたにもできる、支援がある活動資金ご協力のお願い

災害時、日本赤十字社に寄せられた義援金は、その全額が被災者に届けられます。

一方で、被災地での救護活動や、被災者に配布される救援物資には、義援金は一切使われていません。日赤の災害救護活動や国際救援活動、青少年への防災教育活動、救急法の講習など、人間のいのちと健康、尊厳を守る人道支援活動は、すべて活動資金によって賄われています。

皆さまのご寄付が、人道支援活動の支えとなります。ご協力には以下の方法があります。

① **お住まいのお近くの赤十字窓口から（全国 47 都道府県に支部を設置しています）**
② **口座振替による継続的な支援**
③ **クレジットカードによる継続的な支援**

詳しくは、本社パートナーシップ推進部（03-3437-7081）へお問い合わせください。または、日赤ウェブサイトをご覧ください。

www.jrc.or.jp/contribute/support/　日赤　活動支援　検索

ヴォイス VOICE

赤十字NEWSにお寄せいただきました読者の皆さまの声をお届けします。

表紙の小林麻耶さんの言葉に感銘。生きていることへ感謝し、久しぶりに献血をしました。（田代さん／神奈川県）

ワールドニュース、イラクの少女の目を見て。早く赤十字の救護を必要としない国になりますようにと願いました。（三宅さん／福岡県）

present プレゼント

支援マーク付きドーナツ（5個/ 1パック）を3パックセットで3名さまにプレゼント！

日赤の公式マスコット**「ハートラちゃん」のイラスト（支援マーク）入り**のこのドーナツは、日赤に賛同している**全国流通菓子協同組合**の「ちょっとした気持ち」シリーズの1つ。**収益金の一部は日赤に寄付**されることになっており、2016年は**1,067,909円**の寄付を頂きました。

現在、新商品の「スティックケーキ」を含む12種類（一部リニューアル含む）が販売されています。

希望者は、以下の項目を明記のうえ、郵送・FAX・メールでご応募ください。

①お名前（匿名をご希望の方は、その旨もご記入ください）
②郵便番号・ご住所　③電話番号　④年齢
⑤赤十字NEWS 9月号を手にされた場所（例／献血ルーム）
⑥9月号で良かった記事、興味深かった記事はどれですか？（いくつでも）
A. 表紙
B. 救護班には……知られざる“縁の下の力持ち”がいた！
C. ナイチンゲール記章授与式　D. 九州北部豪雨 支援活動
E. とっさのとき、どうする？　F. エリアニュース
G. 健康豆知識　H. Voice　I. プレゼント
J. ワールドニュース　K. 人道支援の現場から
⑦赤十字NEWSのご感想、扱ってほしいテーマ、その他Voice（読者の声）への投稿もお待ちしています。

郵送／〒105-8521
東京都港区芝大門 1-1-3 日本赤十字社
広報室 赤十字 NEWS 9月号プレゼント係
FAX／03-6679-0785 メール／koho@jrc.or.jp
（件名「赤十字 NEWS 9月号プレゼント係」）
9月25日（月）必着

※当選者の発表はプレゼントの発送をもって代えさせていただきます
※個人情報は賞品の発送のみに使用いたします

WORLD NEWS

東アジア青少年赤十字サマーキャンプ

香港（手前2人）、日本のメンバーと（左端が石川さん）。この後5日間、共に考え、学びを深めました

言語の壁を越えて、真剣なディスカッションが行われました

気候変動による自然災害に立ち向かうため 中・高生が国境を越えて、熱く議論

青少年赤十字の国際交流イベント「東アジア青少年赤十字サマーキャンプ」が モンゴルで開催されました。日本からの参加者が、貴重な体験と学びを報告します。

モンゴルの歴史を学ぶため、チンギス・ハーン騎馬像を訪問

台風、大雨、海面上昇、雪害…… 災害の現状を知り、共に対策を考える

７月24日から28日の5日間、東アジアの青少年赤十字メンバーを対象にしたサマーキャンプが、モンゴル赤十字社の主催で行われました。

テーマは「気候変動がもたらす被害の軽減と、回復力の育成」。近年、地球温暖化による気候変動は地球規模の課題となっており、アジアでも多くの自然災害が発生しています。未来を担う若者たちがこの課題にどう立ち向かい、どう対応していくか。モンゴル、韓国、中国、香港、マカオ、そして日本から約80人の中・高校生が集まり、ディスカッションやプレゼンテーションなどのプログラムに臨みました。

日本からは６人が参加。各国の青少年赤十字活動の発表に始まり、気候変動の現状についての講義を受けた後は、いざという時に近隣諸国が一丸となって知恵を出し合い、対策を講じることを目指して、熱のこもった議論が交わされました。レクリエーション時間にはモンゴルの伝統ゲームを通した異文化交流もあり、充実した時間を共有しました。

異文化を肌で感じながら 全ての経験に感動

参加者の石川茉菜（まな）さん（栃木県立真岡（もおか）女子高等学校２年生）は、キャンプで経験した全てが新鮮だったと振り返ります。

「国際交流には初参加。到着した首都のウランバートルはビルが立ち並ぶ都会だったのに、宿泊地のエルデネトは草原が広がった大自然の中で、驚きました。キャンプ中は、国籍の違う初対面の4人と“ゲル”という移動式住居で共同生活したんです。全てがドキドキでした」

プログラムの一環で、乗馬を体験

英語で行われるプログラムに参加することへの不安要素は、言葉の壁だったと語ります。「身ぶり手ぶりを交えてコミュニケーションを取りました。みんな、言いたいことを察しながら最後まで話を聞いてくれて、その優しさに感動。でも、グローバルな場でもっと英語を使えるように、勉強しようと思いました」

空き時間に日本のアニメのことを聞かれたり、オリエンテーションで他国の子が日本で流行したダンスを踊っていたり。アジアにおける日本の存在感を垣間見ることもできたようです。

世界中のみんなとなら 災害にも立ち向かえる！

キャンプに参加する前は、漠然と「気候変動は起きてしまうものだから仕方がない」と感じていたという石川さんですが、キャンプを通じて考え方が大きく変わったと話します。「気候変動に対して行動を起こすためにはどうするのか、どういう手順で立ち向かえばいいのかを学びました。一人ではどうにもできないかもしれませんが、国内はもちろん、世界のみんなで力を合わせれば、立ち向かえると思うようになりました」

海外の赤十字社の若者たちと友情を深め、多くの知識を得て帰国した石川さん。世界の未来への意識も高まり、「この学びを日本の仲間と共有して生かしていきたい」と意気込んでいます。

VOL. 13 人道支援の現場から

「海外の現場」初体験記 ～開発途上国での人の絆～

牛が迷い込んで2時間動かない交通渋滞、往復6時間の事業地への登山、開くまで 30分以上かかるメール、停電、断水、溢れる排水溝に下り気味のお腹……。今年6月から2カ月間、初めて海外の現場で働いた“海外駐在員初心者”の私。着任当初は、開発途上国ネパールならではの環境の洗礼を受けて右往左往しました。

しかし、その分、仕事のやりがいは格別でした。信頼できる現地ネパール人スタッフと一緒に汗をかき、議論し、同じ目標に向かって働けたこと。良き同僚として家に招かれるほど、彼らと親しい人間関係をつくれたこと。そして何より、彼らと共に支援を受けた人々の喜びの声を直接聞けたことは、今後の業務を支える礎になりました。海外の現場での職員の奮闘と彼らを支える現地スタッフの努力によって赤十字の支援が行われていることを改めて痛感しました。

これまで以上に海外で働く職員へのサポートを充実させていこうという決意を、素手で食べるアツアツの現地食のスパイスの香りや、ヒマラヤの絶景などと共に記憶に刻み付け、今後も努力していきたいと思います。

藤嵜 太郎
Taro Fujisaki
ネパール地震復興支援事業（事業管理）
（本社 国際部 企画課）